# セノオ楽譜にみる近代日本のフルート・レパートリー

Flute Repertoire of Senoo Music Score in Modern Japan

渡　邉　玲　子

WATANABE Reiko

キーワード：フルート、フルート・レパートリー、オブリガート、セノオ楽譜、洋楽受容

## ０．はじめに

本研究の目的は､国内の楽譜出版における最初期のフルート･レパートリーを考察することである。これまで近現代の洋楽受容におけるフルートに関する研究は主として四つの方面から行われてきた。①演奏者、②日本人作曲家による作品、③教則本の出版、④楽器の輸入状況および製造会社である。例えば、①演奏者に焦点を当てた近藤（2003）の研究では、来日した外国人フルーティストと日本人フルーティストの演奏記録が詳細にまとめられている。この他近藤は日本へのフルートの伝来についても述べており、これらに加えて②日本人作曲家のフルート作品についても紹介している。そしてこれを追うように青山（2006）は日本人フルート作品の最初期に焦点を当て、当時の演奏状況とともに述べている。これら２つの先行研究は演奏状況を解明したものであり、本稿において筆者が重要視するフルートのレパートリーに関わるものである。次に、③教則本に関する研究として、丹下（2017）が挙げられる。丹下は、フルート愛好家や独習者にとって重要な情報を提供していた日本フルートクラブが出版する『日本フルートクラブ月報』に着目し、昭和35（1965）年頃までに月報内で紹介されていたフルートの教則本について明らかにすることで、フルート教師が少なかった戦後まもない時代の教材を明確に示した。この他、丹下は④楽器の輸入状況についても報告（2015）しており、宮内省式部職の『楽器装束管理録』と音楽取調掛の資料をもとに､明治期から昭和初期に使われていたフルートの仕様について明らかにした。また④楽器の製造会社に関する研究として、ザ・フルート編集部（1998）は国内のフルート製造会社の歴史に焦点を当て、赤松（2019）は楽器産業における製品開発や市場での製品戦略、特にフルート製造の変遷を考察している。

このように、演奏者、作品、出版、楽器といったさまざまな角度から日本のフルート史について解明されつつあるものの、日本人フルーティストが育っていったレパートリーに主眼を置いた研究は見当たらない。そこで筆者は、演奏者を育てる媒体としての楽譜に焦点を当て、その中でも近現代の洋楽受容の中でもっとも人口に膾炙した楽譜として知られるセノオ楽譜に着目した[1]。多くの日本人フルーティストが育つ以前の日本で普及した楽譜の中で、どのような作品を介して当時の日本人はフルートという楽器の認識を始めたのであろうか。そしてその内容はどのような難易度だったのであろうか。そこで、本稿では国内楽譜出版における最初期のフルート・レパートリーとしてセノオ楽譜に着目し、フルートが関わった楽曲の難易度と作品の傾向について考察を行う。

一般にフルート・レパートリーと言えば、フルート・リサイタルで演奏されるような、フルートとピアノのために書かれた独奏曲を思い浮かべるのではないだろうか。しかし、洋楽受容の揺籃期においてはそうではなかったようである。例えば、日本に来た最初の外国人フルーティストであるジョン・レモーネ John Lemmone（1862-1950）[2]は、フルートとピアノのための作品だけでなく、独唱曲にフルートがオブリガートとして加わる作品も演奏していた[3]。こうしたオブリガート作品は、フルートという楽器が日本人向けの演奏会シーンで登場し始めた時期において、日本人がフルートのイメージを形成する上で殊に大切な存在だったようである。先に紹介した研究で近藤は、レモーネ以降に歌手と共に来日した外国人フルーティストについて触れ、「当時のフルートが歌手の助奏楽器として重用されていた」（近藤 2003: 110, 216）と指摘している。また、日本の西洋音楽に関わる記録がまとめられた『日本の洋楽百年史』を確認すると、大正３（1914）年に日本人フルーティストの横山國太郎（生没年不明）が神田青年会館での演奏会においてオブリガートとして出演している[4]（秋山 1966: 279）。これらの記録からも分かるように、この時代におけるフルートの認識、つまり日本人が広く共有していたと考えられるフルートの最初期の認識は、独奏楽器というよりもオブリガートであった。

現在フルートの楽譜の事始めについては分かっていないが、国立国会図書館のOPACで検索できる中で、日本で出版された最古のフルートの楽譜は昭和13（1938）年のものである。では、外国人フルーティストによって国内初演奏された1889年から、この楽譜が出版されるまでの間には、他にどのようなフルートのレパートリーが存在していたのであろうか。セノオ楽譜の分析からフルートが関わる国内楽譜出版の事始めを考察したい。

## １．セノオ楽譜とは

セノオ楽譜とは、大正５（1916）年から昭和13（1938）年[5]にかけて妹尾幸陽（1891-1961）[6]が発行人を務める東京のセノオ音楽出版社から出版されたピース楽譜である。大正時代にたいへんな人気を誇った竹久夢二（1884-1934）が多くの表紙を担当していることから、美術的価値も高い。作品の内容についての詳細は後述するが、主として歌とピアノ、ヴァイオリンとピアノの作品が収録されており、その総数は800点[7]を超える。ピース楽譜それぞれの出版部数については明らかになっていないものの[8]、出版点数の多さについては当時から注目の的であったようだ。先行研究では、その年の音楽界を概観する『音楽年鑑』に、セノオ楽譜の出版数に対して何度も驚嘆の言葉が寄せられた様子が示されており、この他セノオ楽譜の初版の出版点数と出版数の累計についても言及されている（越懸澤 2019 19,20）。また、『音楽年鑑』においてセノオ楽譜の広告は大きく扱われていることから、音楽に興味を持つ人ならば誰もがその存在を知るような有名な楽譜であったと推察される。

### 1-1. セノオ楽譜の各シリーズ

次にセノオ楽譜の各シリーズについて確認しよう。声楽とヴァイオリンのための楽譜として知られるセノオ楽譜だが、実はいくつものシリーズが存在している。具体的には、セノオ音楽出版社から出版された楽譜には【表１】のとおり、「セノオ楽譜〔声楽譜〕[9]」、「セノオバイオリン楽譜」、「セノオ特選楽譜」、「新セノオ楽譜」、「セノオ楽譜〔2000番台〕」、「セノオ楽譜〔5000番台〕」、「セノオ新小唄

楽譜」、「セノオビクター楽譜」、「セノオヤマダ楽譜」、「セノオウエルク楽譜」、「セノオコノエ楽譜」、という11種類のシリーズ[10]があり、それぞれピース番号が付けられている。各シリーズと〔番外〕に示した出版点数を合計すると、セノオ楽譜には実に848点もの作品が出版されていたことが分かる。これらのシリーズの中から、本稿では出版点数の多い上位２つの「セノオ楽譜〔声楽譜〕」と「セノオバイオリン楽譜」シリーズを重点的に扱っていく。

表１　斎藤（2020）より

| | シリーズ名 | 点数 |
|---|---|---|
| 1 | セノオ楽譜〔声楽譜〕 | 500 |
| 2 | セノオバイオリン楽譜 | 172 |
| 3 | セノオ特選楽譜 | 8 |
| 4 | 新セノオ楽譜 | 20 |
| 5 | セノオ楽譜〔2000番台〕 | 15 |
| 6 | セノオ楽譜〔5000番台〕 | 9 |
| 7 | セノオ新小唄楽譜 | 35 |
| 8 | セノオビクター楽譜 | 14 |
| 9 | セノオヤマダ楽譜 | 53 |
| 10 | セノオウエルク楽譜 | 3 |
| 11 | セノオコノエ楽譜 | 7 |
| 12 | 〔番外〕 | 12 |

「セノオ楽譜〔声楽譜〕」とは、セノオ音楽出版社が最初に出版をはじめたシリーズであり、出版点数が500点ともっとも多い。基本的にはピアノ伴奏を伴う声楽作品が収録されており、独唱曲のほか重唱曲、合唱曲も含まれている。なお、それらにヴァイオリンやフルートなど器楽のオブリガートが加わる楽譜も存在する。また、「セノオ楽譜〔声楽譜〕」と本稿では便宜上呼んでいるが、声楽は含まれずにヴァイオリンとピアノのみによる編成の作品も含まれている。

次に「セノオバイオリン楽譜」であるが、これはセノオ音楽出版社が出版する楽譜シリーズのうち、大正９（1920）年に出版が開始され、主としてヴァイオリンとピアノ伴奏によって構成されている楽譜シリーズである。その中には、稀にヴァイオリンの代わりにフルートやヴィオラ、チェロでも代替可とある作品も含まれている。ピース番号は501番から673番まで振られている[11]。

### 1-2. セノオ楽譜に関する先行研究

セノオ楽譜に焦点を当てた先行研究には、以下のものがある。

・越懸澤麻衣　2019 『セノオ楽譜と洋楽受容--大正時代の音楽文化のなかで--』課題番号: 17K13348平成29～30年度科学研究費補助金若手研究（B）に基づく研究成果報告書[12]

・誠（編）　2002-2020[13] 『セノオ楽譜目録（音楽図書館等の所蔵資料を基に)』全４部　兵庫:斎藤伸一（私家版）

越懸澤の研究はこれまでにも触れてきたように、楽譜という出版物そのものだけでなく、出版社/出版者、作曲者、購買者など楽譜を取り巻く事象を多角的に考察し、本邦における洋楽受容史の解明に貢献したものである（越懸澤 2019: 2)。そして、もう一つ重要な文献として挙げられるのが斎藤の『セノオ楽譜目録』である。斎藤はセノオ楽譜出版社および太陽音楽出版社[14]から出版された800点を超える出版物を調査対象とし、その全体を見渡せるような全４部の目録を編んだ。その内容は編者が実際に確認したもののみが反映されている（斎藤 2002: i)。第一部（2002）では、作品名（セノオ楽譜に記載のタイトルと現在知られているタイトルを併記している）および基本的なデータをシリーズとその番号順に配列している。続く第二部（2014）では、作詞者・訳詞者一覧、作曲者・編曲者一覧など種々の一覧および索引を設け、第三部（2019）では全資料の版数データおよび所在を明らかにしている。そして第四部（2020）では、装画をシリーズ順に並べ、ピース番号や作品名と併せて掲載した。以上二つの文献は、本稿において特に重要な資料として参照している。このように、セノオ楽譜に焦

点をあてた先行研究には充実したものがあるものの、これほど人口に膾炙した楽譜に実はフルートが関わる作品が含まれていたという事実はこれまで解明されてこなかった。竹久夢二が表紙を描いたことで一般に知られるセノオ楽譜だが、ここにどのような形でフルートが関わっていたかを検証したのが本稿である[15]。これはフルートを演奏する者にとって大変興味深い事実である。セノオ楽譜の中には稀に管楽器が含まれていたのだが、その中で一番多用されたのがフルートであったことが斎藤の目録からも確認できる（斎藤 2002）。調査の結果、演奏にフルートが含まれる作品は7点であった。以下、セノオ楽譜にフルートが含まれると確認できた方法を示す。

### 1-3. 方法論

筆者はまず、本学図書館に所蔵されているセノオ楽譜のうち、「セノオ楽譜〔声楽譜〕」213点と「セノオバイオリン楽譜」64点を確認した。これらに加え、東京藝術大学附属図書館および東京藝術大学音楽総合研究センターが所蔵する、上記と重複しない「セノオ楽譜〔声楽譜〕」17点と「セノオバイオリン楽譜」25点を合わせた、計230点の「セノオ楽譜〔声楽譜〕」、計89点の「セノオバイオリン楽譜」の、総計319点を確認した[16]。つまり全672点中の半分弱に該当する。【表２】はその内訳である。

**表２　確認した所蔵機関とセノオ楽譜の点数**

| | 国立音大図書館 | 東京藝大図書館<br>及び音楽研究センター | 確認済<br>の点数 | フルートが含まれ<br>る作品の数 | すべての<br>セノオ楽譜 |
|---|---|---|---|---|---|
| セノオ楽譜〔声楽譜〕 | 213 | 17 | **230** | **2** | 500 |
| セノオバイオリン楽譜 | 64 | 25 | **89** | **5** | 172 |
| 小計 | 277 | 42 | **319** | **7** | 672 |

調査の結果、フルートが含まれる作品は２種類に分類できることが分かった。まず一つ目は、フルートがオブリガートとして声楽曲に伴う作品である。そして二つ目はスコアに「Violin（or Flute)」と記載があり、ヴァイオリンの代わりとしてフルートでも代用可能な作品である。以降、これらについて本稿では前者を「フルート･オブリガート作品」、後者を「フルート代用作品」と呼ぶこととする。

具体的に、フルート・オブリガート作品に該当する楽曲は「セノオ楽譜〔声楽譜〕」に含まれる、ピース番号４番のシャルル・グノー Charles Gounod（1818-1893）の《夜の調べ》と、256番の「米國名歌　古ニグローの愛歌」とある《ミネトンカの湖畔》の2点である。そしてフルート代用作品に該当する楽曲は「セノオバイオリン楽譜」に含まれる、532番フレデリック・フランソワ・ショパン Frédéric François Chopin（1810-1849）の《ポロネーズ『軍隊』》、同じくショパンの534番《幻想即興樂中の歌調》、535番《ショパンのベルセーズ（子守歌)》、601番ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー Peter Ilyich Tchaikovsky（1840-1893）の《怪談曲》、同じくチャイコフスキーの603番《流浪樂師の歌》の計5点であった【表３】[17]。本論ではこれら７点の楽譜を研究対象とし、洋楽受容の揺籃期に出版されたフルート・レパートリーの考察を行う。

表３　演奏にフルート含まれる作品一覧

| ピース番号 | シリーズ名 | 作曲者 | タイトル | 編成 | 役割 | 初版年（西暦） | 重版数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | セノオ楽譜〔声楽譜〕 | グノー | 夜の調べ | V,vn or fl,pf | オブリガート | 大正4（1915） | 25 |
| 256 | セノオ楽譜〔声楽譜〕 | 米国名歌 | ミネトンカの湖畔 | V,vn or fl ad lib.,pf | オブリガート | 大正12（1923） | 3 |
| 532 | セノオバイオリン楽譜 | ショパン | ポロネーズ『軍隊』 | vn(or fl),pf | ヴァイオリンの代用 | 大正9（1920） | 4 |
| 534 | セノオバイオリン楽譜 | ショパン | 幻想即興楽曲の歌調 | vn(or fl),pf | ヴァイオリンの代用 | 大正9（1920） | 再 |
| 535 | セノオバイオリン楽譜 | ショパン | ショパンのベルセーズ（子守歌） | vn(or fl),pf | ヴァイオリンの代用 | 大正9（1920） | 再 |
| 601 | セノオバイオリン楽譜 | チャイコフスキー | 怪談曲 | vn(or fl),pf | ヴァイオリンの代用 | 大正12（1923） | 再 |
| 603 | セノオバイオリン楽譜 | チャイコフスキー | 流浪楽師の歌 | vn(or fl),pf | ヴァイオリンの代用 | 大正12（1923） | 再 |

## ２．セノオ楽譜のフルート・レパートリー

### 2-1．フルート・オブリガート作品

フルートがオブリガートとして用いられている作品は、上項で述べたようにピース番号４番グノーの《夜の調べ》と、256番の「米國名歌　古ニグローの愛歌」とある《ミネトンカの湖畔》である。どちらもフルートがさまざまな形で声楽曲に助奏する。それではまずフルート・オブリガート作品について概要を確認した後、それぞれの作品の難易度について考察していきたい。

#### 2-1-1．ピース番号４番　グノー《夜の調べ》

原曲はヴィクトル・ユゴー Victor Hugo（1802-1885）の詞[18]にグノーが曲を付けたもので、1857年に作曲された声楽曲である。グノーのフランス歌曲の中で大変親しまれている作品の一つであり、これまでさまざまに編曲された楽譜が出版されている。原曲はフランス語の歌詞だが、このセノオ楽譜においては、訳詞家として数々の西洋曲を日本に紹介した近藤朔風[19]（1880-1915）による邦訳が用いられた。現在フルートが加わる編成で演奏される機会はないが、この時代には註２で触れたように、来日した最初の外国人フルーティストであるレモーネが明治22（1889）年にこの曲を披露している他（*The Japan Weekly Mail* 1889 June29: 636, 637）、昭和６（1931）年には、イタリア生まれの名ソプラノであるトーティ・ダル＝モンテ Toti Dal Monte（1893-1975）がフルートの助奏付きで演奏した記録が残っている（秋山 1966: 471）[20]。また、声楽のみの編成では、三浦環（1884-1946）や関屋敏子（1904-1941）が演奏し、レコードとして残っていることから、この作品は明治後期から昭和初期にかけて流行していた楽曲だと推測できる。セノオ楽譜では大正４（1915）年に初版が出版された後、昭和２（1927）年までの12年間に25版まで重版された[21]ことから、この作品が当時の日本人にとって人気の高い魅力的なものであったと窺える。

次にオブリガート・パートの難易度に注目したい。この作品は、アマチュアでも演奏可能だが、表現の面で難しい楽曲であるといえる。フルートの音域はおよそ３オクターブあり、低音域、中音域、高音域に分類することができる。フルートは高音域になるほど音が大きく鳴るという特性を持ってい

るが、この楽曲においてオブリガート・パートが目立つ部分では高音域且つ p の音量で書かれている。また、その後すぐに第 3 オクターブで16分音符の動きがあり、それを均等な動きではなくしなやかに演奏しようとすると、熟練の技術や表現力が必要になる。テンポ自体はゆっくりのため、アマチュアが演奏することも可能ではあるが、以上の理由から表現の面で難しい楽曲であると言える。

### 2-1-2. ピース番号256番　ポール・ホワイトマン Paul Whiteman（1890-1967）《ミネトンカの湖畔》

続いて、もう一つのフルート・オブリガート作品《ミネトンカの湖畔》を見ていく。曲の解説部分には「米國名歌『古ニグローの愛歌』　ミネトンカの湖畔」とあり、サーロー・リューランス Thurlow Lieurance（1878-1963）[22]による編曲、妹尾幸陽による訳詞と書かれている。以下奥付に書かれた解説を掲載する。

> 昔、亜米利加印度シユー族の「日の族」「月の族」の男女が種族の掟に背いて互いに恋しあった為、種族の制裁を受ける事となつた。そこで彼らは故郷の地を逃れ、ミネトンカの湖水[23]に相抱いて投身した。其折に二人が交わした対話を歌にし亜米利加土人が歌つて居たものが此の歌で旋律は原語に絶する程美しい。（原文ママ）

現在、演奏機会に恵まれた作品とは言えないが、解説の「シユーマンハインク夫人の日本での、此の曲の演奏が、今でも忘れる事は出来ない」との文言から、エルネスティーネ・シューマン＝ハインク Ernestine Schumann-Heink（1861-1936）の演奏を聴いた時の感動から、美しい作品を世に出したいという思いが本作品への出版に繋がったと読み取ることができる。シューマン＝ハインクの演奏記録は残っていないが、日本人歌手では昭和 6（1930）年、宮川美子[24]（1911-1995）が歌った音源がSPレコード復刻版として残っている[25]。この音源はイ長調で歌われているのだが、本研究で用いる楽譜も初版（大正12（1923）年）では変ト長調であったところ、翌年の改訂版から第 3 版（昭和 4（1929）年）ではイ長調に移調されている。イ長調の方が湖畔の水の輝きが引き立つ調性であり、ヴァイオリンの開放弦の都合を考慮しても、調号が多い変ト長調よりも技術的に易しいイ長調の方が一般に好まれたのだろうと推測する。

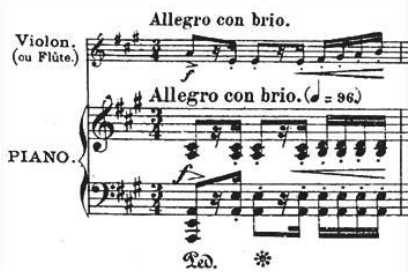
この作品において、湖畔の水の輝きやゆったりとしたと流れを表現する細かな音の部分はピアノが担っており、オブリガート・パートは歌に優しく寄り添い、歌手がブレスを取る箇所の音楽が切れないよう、フレーズとフレーズを繋ぐような役割を担っている。ヴァイオリンにしてもフルートにしても、初心者の場合、変ト長調のような調号が多い譜面は、指使いを考えながら演奏する必要があるものの、テンポは「Andante moderato」と緩やかで技術的には易しい作品である。それゆえ、アマチュアでも十分演奏可能な作品であると言えるだろう。

## 2-2. フルート代用作品

ここでは、「セノオバイオリン楽譜」の中から、ヴァイオリンだけではなく、フルートでも代用可とされた楽譜 5 点を扱う[26]。【譜例 1】で示したように、演奏パートには「Violin.（ou Flûte.）」と記載さ

れている。以下、作曲家ごとに順番に確認する。

【譜例１　ショパン《ポロネーズ「軍隊」》より】




### 2-2-1. ショパンとフルート作品

ショパンの作品はフルートでも演奏機会のある作曲家である。例えば、全21作のノクターンの中で特に一般的に親しまれているノクターン第２番作品9-2は、フルートでも殊に演奏頻度の高い作品である。編曲されたショパンの楽曲は、フルートで演奏するのにちょうど良い音域であることが人気の理由であろう。有名フルーティストによる編曲の楽譜もいくつか出版されている[27]。この曲のほか、ノクターン第20番《遺作》や《子犬のワルツ》で知られる作品64-1、ノクターン第19番作品72-1、ノクターン第８番作品27-2など、ショパンはノクターンを中心にフルートとピアノによって演奏されることが多い。

#### 2-2-1-1. ピース番号532　ショパン《ポロネーズ『軍隊』》

ポロネーズ《軍隊》イ長調・作品40-1は、1838年に作曲され、ジュリアン・フォンタナ Julian Fontana（1810-1869）に献呈されたピアノのための作品である。この曲は現在《軍隊ポロネーズ》として有名であるが、セノオ楽譜においては「ポロネーズ『軍隊』」と曲名が付けられている。この作品は、大正９（1920）年に初版が出版された後、大正13（1924）年までに４版が重版されており、セノオバイオリン楽譜の中では重版数の多い作品である。

現在出版されているフルート曲集には、ゆるやかなテンポで伸びやかな旋律を持つ作品が収録されることが多いが、このような力強さが求められる楽曲にフルートが用いられることは非常に珍しい。この曲について妹尾は「勇壮な壮大なことで最も著名な洋琴曲の一つ」と述べているが、このように力強さと迫力が必要とされる楽曲に、張りのある低音を出すことが難しいフルートの音色はあまり好まれない。ヴァイオリンで演奏する場合は音域的に問題ないが、同じ楽譜をフルートで演奏する場合、フルートの演奏可能音域を越える音符が書かれているため、楽譜通りに演奏することができない。これに加え、旋律パートは低音域が多いため、ピアノが音量を抑えたとしてもフルートは音量的に埋もれてしまいやすい。これらの観点から、作品の特徴を捉えた演奏をすることには限界があるため、この作品を演奏する際には、音域を１オクターブ上げて、フルートの演奏可能音域に調整するなどの工夫が必要である。

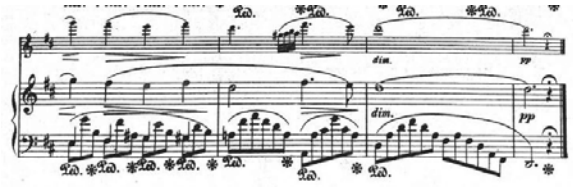
#### 2-2-1-2. ピース番号534　ショパン《幻想即興樂中の歌調》

続いて《幻想即興樂中の歌調》を見ていきたい。この曲は、《幻想即興曲》嬰ハ短調・作品66（遺作）である。1834年、ショパンが24歳頃の作品で、彼の死後1855年に友人のJ. フォンタナによって出版された。「セノオバイオリン楽譜」においては大正９（1920）年に出版された後、大正11（1922）年と大正14（1925）年に再版されている。そして、タイトルに《幻想即興樂中の歌調》とあるように、原曲の三部形式の中で中間部にあたる美しいカンタービレの旋律部分が抜粋されたもので、この版で

は原曲の変二長調の部分がここでは半音上げたニ長調で書かれている。移調を用いた理由として、ヴァイオリンの楽器の特性が関係していると考えられる。上項でも触れたが、ヴァイオリンは開放弦の都合上、フラットが多い変ニ長調では楽器の響きが曇り気味になるのに加えて、指の動きも複雑になる。フルートで演奏する場合、調性による楽器の響き具合はさほど変わらないが、調号の多さによる読譜の難しさを考えると、変ニ長調よりも技術的に易しいニ長調の方が好まれると考えたのだろう[28]。

この編曲では、原曲の右手の旋律がフルートによって奏でられ、原曲の左手パートは両手で演奏できるように振り分けられている。また、原曲の中間部を取り出した編曲のため、曲の始まりには２節間の前奏が付け加えられており、最後の部分にも【譜例２】に示したように、曲の終わりに２小節が足されている。

【譜例２　ショパン《幻想即興樂中の歌調》より最後4小節間】




音域について見てみると旋律パートの音域は２オクターブ半と、比較的フルートで鳴らしやすい音域で書かれている。しかし初心者にとって高音域は若干出しにくく、ブレスを十分に取れる部分がないことを考えると、心地よく演奏できるのは中級者以上であると言えるだろう。また、原曲には中間部に「Moderato cantabile」とあるが、フルートは息の都合上、ヴァイオリンと異なり、時間をかけてたっぷりと歌うには演奏の体力と息をコントロールする技術が必要である。これらのことなどから、フルートで演奏する場合には、原曲より少し速めのテンポを設定した上で、息の配分に十分気を付けながら伸びやかに演奏すると良いだろう。

### 2-2-1-3. ピース番号535　ショパン《ベルセーズ》

次に《子守歌》変二長調・作品57について見ていきたい。この曲は1843年から1844年にかけて作曲され、エリーズ・ガヴァール嬢に献呈された（野村光一 1981: 316）。

この作品は今回調査した楽曲の中で、もっとも技術的に難しい作品である。ヴァイオリンとピアノのために編曲された版であることから、フルートでは出せないような音域や奏法が至るところで使われており、フルートの現実的な奏法に寄り添ったものとは言えない。ヴァイオリンで演奏するにおいても非常に高い技術が必要とされるように見受けられる。

### 2-2-2. チャイコフスキーとフルート作品：《流浪樂師の歌》、《怪談曲》

続いてチャイコフスキー作品をまとめて俯瞰する。チャイコフスキーの作品は、フルート・アンサンブルのレパートリーとして大変好まれている。その中ではバレエ音楽《くるみ割り人形》の人気がとりわけ高く、フルート・アンサンブル用の編曲も多数存在する。ただし、フルート独奏曲のための編曲作品としてチャイコフスキーの認知度は低く、ピアノのための《６つの小品》作品51より〈感傷的なワルツ〉が出版されてはいるが、演奏される機会は滅多にない。

本研究で扱う２曲は、チャイコフスキーが1878年に作曲した24の小品から成るピアノ曲集《子供のアルバム》作品39番の中から、19曲目の〈怪談曲〉と、23曲目の〈流浪樂師の歌[29]〉である。どちら

もヴァイオリンの名手、ウィリー・ブルメスター Willy Burmester（1869-1933）[30]によってヴァイオリンとピアノ用に編曲された。両作品とも大正12（1923）年に初版が出版され、その後大正14年（1925）に再版されている

《怪談曲》

この作品はフルートにとって比較的鳴らしやすい音域で書かれている。テンポも速くなく、音価も八分音符から二分音符までの読みやすい譜面であることから、アマチュアでも演奏可能な比較的易しい作品であると言えるだろう。

《流浪樂師の歌》

この作品は今回取り上げた中で最も技術的に易しい譜面である。ABA'B'のフレーズで成り立っており、B'部分に当たる最後の16小節間は、前半部と全く同じ譜面にならないよう、ヴァイオリンのハーモニクスの指示があるが、フルートでは楽譜に書かれているハーモニクスを再現することができない。フルーティストが演奏会においてこの作品を取り上げる場合、音量やフレーズごとのテンポの作り方、音域を工夫し、音色の変化を付けて演奏する必要があると言えるだろう。

### 2-3. 原曲がフルートの作品

ここまで演奏にフルートが関わる作品を取り上げてきたが、実はセノオ楽譜には原曲がフルートの作品も含まれていることが分かった。調査した計319点の楽譜の中で、原曲がフルートの作品は２点見つかった[31]。それが596番ヨハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach（1685-1750）の《シシリエンヌ》と、615番クリストフ・ヴィリバルト・グルック Christoph Willibald Gluck（1714-1787）の《『オルフォイス』中の旋律》である。以下、作品の詳細について示す。【表５】は確認したセノオ楽譜の詳細をまとめたものである。

表４　原曲がフルートの一覧

| ピース番号 | シリーズ名 | 作曲者 | タイトル | 初版年（西暦） | 版数 | 編成 | 所蔵機関 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 596 | セノオバイオリン楽譜 | バッハ | シシリエンヌ | 大正12（1923） | 再 | vn,pf | 東京藝術大学附属図書館 |
| 615 | セノオバイオリン楽譜 | グルック | 『オルフォイス』中の旋律 | 大正14（1925） | 初 | vn,pf | 東京藝術大学附属図書館 |

#### 2-3-1. 596番　バッハ《シシリエンヌ》

この作品は、《フルート・ソナタ》第２番変ホ長調から第２楽章である。楽譜にはバッハ作曲とあるが、現在では偽作とする説が有力である（角倉一朗 1980: 111）。この楽譜はレオポルト・アウアー Leopold Auer（1845-1930）による編曲で、原曲にはない繰り返しがある他、旋律パートをピアノにも振り分けるなど、さまざまなアレンジが加えられている。

### 2-3-2. 615番　グルツク《『オルフォイス』中の旋律》

この曲は、オペラ『オルフェオとエウリディーチェ』からの一曲で、一般に〈精霊の踊り[32]〉の名で親しまれている。もともとフルートのための独奏曲ではないが、オーケストラの中でフルートが活躍するため、フルートの名曲として広く知られている。楽譜奥付の解説には、「この旋律は『オルフォイス』の中、バレー（ママ）のフリユート独奏部をとつたもので実に純美な音楽の標本と見られて居ります」と書かれている。この楽譜はモード・パウエル Maud Powell（1867-1920）による編曲で、譜面にボーイングの指示などが加えられているものの、演奏内容は現在フルートで演奏される版と大差なく、原曲のフルートの旋律を生かした編曲になっている。

現在、どちらの作品もフルーティストにとって重要なレパートリーであり、演奏機会の多い作品である。これらの作品は当時はフルートではなく、ヴァイオリンによって演奏されていたであろうことは興味深い。

## 3．まとめ

今回の調査で確認できたセノオ楽譜319点の中で、フルートが含まれる作品が７点であったことは、数字だけ見ると少ないと言わざるを得ない。しかし、洋楽受容の揺籃期においてこれほどまでに人口に膾炙した楽譜の中に、実はフルートが使われる作品が存在していたという事実が重要であるように思う。実際、ピース番号４番の《夜の調べ》はセノオ楽譜の中で最も多い重版数を誇っており、これまで確認したように外国人フルーティストによる演奏記録も残っていることから、この作品を介して多くの日本人にフルートという楽器のイメージが共有されていった可能性があることが浮かび上がった。「０. はじめに」では、日本のフルート史において、フルートは声楽曲に伴うオブリガートとしての役割があったことを確認したが、今回の調査からその歴史の理解を深めることに繋がった。

また、セノオ楽譜に収められている楽曲の内容は、演奏時間が５分程度と短い作品が多かったものの、アマチュアにとって演奏可能な技術的に易しい楽曲から、高い技術力や表現力が求められる作品も含まれていたことが分かった。このことから、セノオ楽譜はアマチュアだけでなく、プロの演奏会においても活用される楽譜を目指していたことが窺える。セノオ楽譜はプロとアマチュアのどちらかに偏るのではなく、さまざまな難易度のレパートリーを提供することで、幅広い立場の人々が演奏できることを目指していた楽譜シリーズだと言えるだろう。

### 註

1　セノオ楽譜について、越懸澤は「大きな成功を収め、同時にこの時代〔大正時代〕の楽譜として今日もっとも名が知られている」(越懸澤 2019: 2)、「まさに大正時代の音楽界の縮図のような楽譜」(越懸澤 2015: 41）と語っている。

2　オーストラリア生まれで、イギリスを中心に活躍したフルーティスト（近藤 2003: 50)。明治22（1889）年にエイミー・シャーウィン Amy Sherwin（1855-1935）が率いる歌劇団と共に来日し、主に横浜のパブリック・ホールで公演を行った。ヴィルトゥオーゾであり技巧的な作品を数多く残したことで知られるアル

ベルト・フランツ・ドップラー Albert Franz Doppler（1821-1883）やジュール＝オーギュスト・ドゥメルスマン Jules=August Demersseman（1833-1866）、テオバルト・ベーム Theobald Böhm（1794-1881）、ジュリオ・ブリッチャルディ Giulio Briccialdi（1818-1881）による作品を演奏していることから、レモーネは優れた技巧の持ち主であったことが窺える。彼は2年後の1891年に、ジャネット・パティ Janet Monach Patey（1842-1894）率いる一座とともに再来日している（*The Japan Gazette* 1889 June）、*The Japan Weekly Mail*（1889 June, 1891 February, March）。】

3 *The Japan Gazette*（1889 June）、*The Japan Weekly Mail*（1889 June）によると、レモーネはオブリガートとして以下の4曲を演奏している。①作曲者不明《小鳥はとても甘く歌う Little bird so sweetly singing》（1889）年6月4、24日演奏）、②H. R.ビショップ《見よ、優しいひばり Lo,here the gentle lark を》（1889年6月6日演奏）、③作者不明《窓辺にいるのは誰 Who is at my window》（1889年6月6日演奏）、④C.グノー《セレナーデ Serenade》（1889年6月24日）である。

4 横山の経歴と演奏の詳細は、近藤（2003）に詳しい（近藤 2003: 102）。

5 セノオ楽譜の発行開始時期については斎藤（2002: i）によって明確に示されているのだが、いつまで発行されていたかについては明言されていない。しかし、大まかな発行期間を把握するため、この数字は斎藤目録第1巻（2002）に示されている中で、最後に出版されたピース楽譜の初版発行日を引用した。

6 「幸陽」は妹尾が楽譜の解説などを行う際に使用した名。本名は妹尾幸次郎（明治24年～昭和36年、1891-1961）。わずか19歳でセノオ楽譜の出版を始業。若い頃はアマチュアの声楽家として舞台にも立ち、さらに作編曲や歌詞の翻訳、外国人演奏家が来日した際のマネージメントの他、雑誌に音楽評論を寄稿するなど、多彩な活動を行った。越懸澤（2019: 116）は、妹尾が勢力的な楽譜出版を行う動機を端的に述べたものは見当たらないが、演奏家が沢山の楽譜を見られるよう、セノオ楽譜シリーズを通じて幅広いレパートリーを提供したと結論づけている。しかし筆者は、妹尾は若い頃から音楽に携わり、声楽を師事したイタリアの音楽家アドルフォ・サルコリ Adolfo Sarcoli（1867-1936）や、当時の日本の声楽界を牽引したソプラノ歌手である三浦環（1884-1946）など、数々の著名な音楽家との関わりの中から、日本の音楽界を客観的に捉えた結果、あらゆる角度から音楽の在り方を見つめる必要性を国民に提示するため、その活動の一つとして、800点を超える幅広いレパートリーを出版するに至ったのではないかと推測する。

7 斎藤の『セノオ楽譜目録』を参考に、セノオ音楽出版社から出版された楽譜の収録点数を記載した（斎藤 2020: 205）。

8 作品の人気度については重版の数を手掛かりに見極めることができる。

9 〔　〕で示した部分について、実際の楽譜に「声楽譜」とは書かれてはいないが、声楽作品が多く収録されているため、越懸澤（2019）の表記を踏襲し、このように記載した。

10 シリーズそれぞれの点数は『セノオ楽譜目録』第4部の内容を引用した（斎藤 2020: 205）。なお、表中の〔番外〕とは番号の不明な出版物に加え、シリーズでない出版物とシリーズ名はあるが1点しか確認されていない出版物に斎藤が仮の番号を与えたものを示している。また、セノオ音楽出版社から出版された出版物の中には、この他「セノオ歌劇全訳叢書」というシリーズがあるが、巻末に歌劇中の有名な旋律の楽譜が掲載されてものの、これらは楽譜ではなく邦訳をメインするため、表に記載しなかった。

11 「セノオバイオリン楽譜」の出版番号〔ピース番号〕について、越懸澤（2019）は501～670番としている

が（越懸澤 2019: 16）、斎藤の『セノオ楽譜目録　第四部』(2020）では673番までの楽譜の装画一覧が掲載されており、目録から楽譜の存在が確認できるため、本稿ではこの数字を採用した。

12　セノオ楽譜に関する越懸澤の研究には2015年のものもあるが、その研究内容はすべて上記の報告書に含まれているため、ここでは省略した。

13　第一部2002年、第二部2014、第三部2019年、第四部2020年。

14　セノオ音楽出版社は、戦後に太陽音楽出版社に継承された（斎藤 2002: i)。

15　本研究は本学特任教授の小泉恵子先生より、セノオ楽譜の中にフルートが使われている楽譜を見かけたと伺ったことから始まった。ここに記して感謝の意を表したい。

16　国内でもっとも多くセノオ楽譜を所蔵しているのは日本近代音楽館であり、斎藤によると、計770点もの数を所蔵している（斎藤 2019: 120)。しかし筆者が調査に訪れたところ、多くの楽譜にまだ請求番号が振られておらず、2022年10月15日時点では閲覧が叶わなかった。

17　タイトルは現在知られている曲名ではなく、楽譜奥付に記載の曲名で統一した。また、535番ショパンの《ベルセーズ》以外は、いずれも本学附属図書館所蔵である。

18　楽譜奥付の解説には『汝の唱ふ時』と邦訳されている。

19　近藤の訳詞曲は小学校、中学校、高等学校の音楽の教科書に採用されており、この曲《夜の調べ》は高等学校の音楽の教科書（教育芸術社、教育出版社、音楽之友社）に採用されていた（坂本 2016: 35)。

20　『日本の洋楽百年史』(秋山 1966: 471）より。これについては近藤でも触れられている（近藤2019: 109)。

21　斎藤の『セノオ楽譜目録』第3部（2019: 121-）を確認すると分かるように、この版数は、「セノオ楽譜〔声楽譜〕」シリーズの中でもっとも多い重版数である。この重版数については越懸澤も言及しており、「10版以上の重版が出版された楽譜」として表に示している。

22　リューランスは昭和12（1937）年に、東京音楽書院より《インディアンメロディー》と題した、歌（合唱も含まれている）とピアノのための曲集を出版しており、そこでは妹尾幸陽による訳詞が用いられている。また、その曲集に収められた20曲のうち、フルートがオブリガートとして含まれる作品は５つある。

23　ミネトンカ湖（Lake Minnetonka）はアメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリス西郊（ヘネピン郡・カーヴァー郡）にある湖。面積は59km$^2$あり、湖岸線は複雑に入り組み多数の湾を形成している。東側のミネハハ・クリーク川で流出し、ミネハハ滝を通ってミシシッピ川に合流する。ミネアポリス・セントポール都市圏では最大の湖で代表的観光地である。

24　ソプラノ歌手。アメリカで生まれる。パリのオペラ・コミック座で研鑽を積み、昭和６（1931）年「蝶々夫人」でデビュー。帰国して公演、放送、録音などを行う。

25　当時20歳だった宮川美子と日本コロムビア交響楽団による演奏。（リューランス　1931　ミネトンカの湖畔　宮川美子　NE35777）宮川は三浦環と並び、日本の生んだ世界的ソプラノ歌手で、コロムビア専属だった。

26　スコアの部分に「Violin (or Flute)」などと書かれている。

27　Galway, James. 1986. *THREE NOCTURNES*. New York: HAL LEONARD や中野真理　2018 『フルートのしらべ２』 東京：株式会社リットーミュージックが挙げられる。

28　同じような理由で移調したと考えられるセノオ楽譜の作品例として、セノオバイオリン楽譜ピース番号

506番のアントニン・レオポルト・ドヴォルザークAntonín Leopold Dvořák（1841-1904）の《ユーモレスク》が挙げられる。

29　現在は〈辻音楽師〉、〈辻音楽師は歌う〉、〈手回し風琴弾きは歌う〉などいくつもの名で呼ばれている。

30　妹尾の解説では、「バーメスター」と表記されている。

31　原曲がフルートの作品は他にも存在する。ここでは筆者が実際に確認したもののみを記載した。

32　《妖精の踊り》と呼ばれることもある。

## 参考文献


図書

越懸澤麻衣　2019 『セノオ楽譜と洋楽受容―大正時代の音楽文化のなかで―』課題番号：17K13348平成29～30年度科学研究費補助金若手研究（B）に基づく研究成果報告書

近藤滋郎　2003 『日本フルート物語』 東京：株式会社音楽之友社

角倉一朗　1981 「J. S. バッハ」『最新名曲解説全集　第15巻　独奏曲Ⅱ』 111-113　東京：音楽之友社

野村光一　1980 「ショパン」『最新名曲解説全集　第11巻　室内楽曲Ⅰ』 315-316　東京：音楽之友社

誠（編） 2002 『セノオ楽譜目録（音楽図書館等の所蔵資料を基に）第一部』(私家版)　兵庫：斎藤伸一

誠（編） 2014 『セノオ楽譜目録（音楽図書館等の所蔵資料を基に）第二部』(私家版)　兵庫：斎藤伸一

誠（編） 2019 『セノオ楽譜目録（音楽図書館等の所蔵資料を基に）第三部』(私家版)　兵庫：斎藤伸一

誠（編） 2020 『セノオ楽譜目録（音楽図書館等の所蔵資料を基に）第四部』(私家版)　兵庫：斎藤伸一

ザ・フルート編集部　1998 『国産フルート物語：フルートメーカーの歴史』 東京：アルソ出版

ムラマツフルート（編）2010 『村松孝一没後50年メモリアル　礎』 埼玉：村松フルート

論文

青山夕夏　2006 「近代日本人作曲家による初期のフルート音楽」 香川大学教育学部『香川大学教育学部研究報告 第Ⅰ部』第126巻：17-32

秋山龍英　1966 『日本の洋楽百年史』 東京：第一法規出版

越懸澤麻衣　2015 「セノオ楽譜からみる大正時代の洋楽受容」 東京：東京藝術大学音楽学部『東京藝術大学音楽学部紀要』第41号：29-43

坂本 麻実子　2016 「音楽教育と近藤朔風の訳詞曲―没後100年に考える―」 富山大学人間発達科学部『富山大学人間発達科学部紀要』10巻2号：33-42

丹下聡子　2015 「村松孝一研究(1)：ベーム式フルート製作の始まり：明治期から昭和初期における国内の楽器情況」　愛知県立芸術大学『愛知県立芸術大学紀要』第45巻：151-164

丹下聡子　2017 「比田井洵研究：比田井洵編著『アルテ・フルート教則本』出版について」 愛知県立芸術大学『愛知県立芸術大学紀要』第46巻：43-55

新聞

*The Japan Gazette* 1889

(June 5: 2, June 7: 2, June 8: 3, June:11: 2, June 13: 2, June:18: 2, June:22: 3, June 25: 3)

*The Japan Weekly Mail* 1889

(June 8: 552-553, June 15: 582, June 22: 612, June 29: 636-637),1891 (Feb: 241)

セノオ楽譜

4 番　グノー 『夜の調べ』 大正 8 (1919) 年出版　第八版

256番　ホワイトマン 『ミネトンカの湖畔』 大正12 (1923) 年　初版

532番　ショパン 『ポロネーズ軍隊』 大正12 (1923) 年　第三版　国立音楽大学附属図書館所蔵　請求番号 H0-698

534番　ショパン 『幻想即興楽中の歌調』 大正 9 (1920) 年　初版　国立音楽大学附属図書館所蔵　請求番号H0-699

535番　ショパン 『子守歌』 大正14 (1925) 年　再版

601番　チャイコフスキー 『怪談曲』 大正14 (1925) 年　再版

603番　チャイコフスキー 『流浪楽師の歌』 大正12 (1923) 年　初版

その他の楽譜

井上昭史 (著) 2014 『フルートとピアノで奏でる珠玉の名曲17選』 東京：株式会社ドレミ楽譜出版社

衛藤幸雄 (編) 1996 『フルート名曲31選』 東京：ドレミ楽譜出版社

東京音楽書院編集部　1937 『インディアンメロディー』 東京：東京音楽書院

中野真理 (監修) 2007 『フルートのしらべ―ピアノ伴奏に合わせて１人でも楽しめる究極の25曲』 東京：株式会社リットーミュージック

中野真理 (著) 2018 『フルートのしらべ２―至高の技が奏でる究極のスタンダード編【改訂新版】』 東京：株式会社リットーミュージック

西田直孝・白尾隆 (編纂) 2006 (第９版発行) 『ＭＦＬＣ講師が選んだ40フルート小品集』 東京：ムラマツフルートレッスンセンター出版

Galway, James. 1986. "*THREE NOCTURNES　Field・Chopin・Boulanger*." New York:HAL LEONARD

CD

Hugo, Victor 1912 『夜の調べ』 三浦環 (歌) Vintage / Yamano Music : YMCD-1024

Hugo, Victor 1929 『夜の調べ』 関屋敏子 (歌) Victor : VDC-538

Lieurance, Thurlow 1931 『ミネトンカの湖畔』 宮川美子 (歌) Vintage / Yamano Music : YMCD-1027

電子資料

近代日本刊行楽譜総目録　洋楽編　https://rnavi.ndl.go.jp/score/search/ (2022年10月１日閲覧)